
はじめ

伊良

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじめ

【Nコード】

N4212E

【作者名】

伊良

【あらすじ】

私はもう100年もこの世の中の移り変わりを見てきた。私はこの国の政治や庶民の文化、あらゆる戦争までも見てきた。いや僕とは言った方がしっくりくる気がする。僕の肌はきめ細やかでシワもない、髪も真っ黒でつやがある。そういつからか僕の体は成長するのをやめてしまったのだ。

1. プロローグ

私はもう100年もこの世の中の移り変わりを見てきた。私はこの国の政治や庶民の文化、

あらゆる戦争までも見てきた。いや僕はと言った方がしっくりくる気がする。僕の肌

はきめ細やかでシワもない、髪も真っ黒でつやがある。そういつから僕のは成長する

のをやめてしまったのだ。

そこで僕は考えたのである自分にできる事を。

そしてなぜ研究所でこのような研究が行われていたのか。

今は高校生をしている名前は、はじめ

2・高校3年生（前書き）

普通の高校に通っているはじめ

2・高校3年生

2・高校3年生

朝の太陽が昇りまだ肌寒い春の季節

ごく普通の進学校に通っているはじめはいつも通りに学校の門を駆け足で通った。

「ガシャン」と鈍く鉄のぶつかる音がなるとすぐに

「セーフ」息を切らすことなくはじめはいつも通り得意気に同じ言葉を言った。

「おいおい何がセーフだ」「いつもそんな調子じゃ就職なんかできないぞ」担任の藤原があきれながら言い放った。

藤原は教え子思いでどの生徒からも愛されている先生である。

「平気、平気」はじめは頭の上で手を振り背中では話をしながらすたすたと校舎へと入っていった。

下駄箱で靴を履き替えて廊下を歩いていると名前がずらりと並んだクラス替えが貼り出されていた。

1から8組まであるクラスの中でははじめは理系の特進クラスの8組である。

毎年8組はいつも定期テストではトップを独占状態で、他の生徒からは憧れのクラスであった。

はじめはいつも通り1番遅れて入り「おはよう！」そして1番元気良く教室に入るのだった。

いつもと変わりのない教室の光景が目に入ってきた。

みんながクラス替えて浮かれている中8組は3年間クラス替えがないのだった。

「おはよう！」クラスいや学年で1番の美人と称される九条あいらが声をかけてきた。

「良いな」はじめ君は頭が良くて「あいらが羨ましそうに言った。

「習熟度試験に向けてみんな早くから学校に来て勉強してるのに、はじめ君はいつも通り遅刻ギリギリにきてるし」あいらは少し笑みを浮かべながら言った。

みんなより数倍の人生を生きてきたはじめは、何を質問しても答えてくれるのでみんなから良く頼られていた。

「ハハハ・・・」いつもこのように流すのがはじめのお決まりのパターンであった。

「じゃあまた！わからないところがあったら教えてね！」もうすぐHRが始まるからか席に戻っていった。

クラスの誰一人にも自分が年を取らなくなった事を打ち明けていなかった。

いつもテストでトップばかり取るので、さすがのはじめも少し卑怯な気がして気持ちよくはなかったがこれもしかたない事だと自分に言い聞かせていた。

しかし年をとらない「寿命がこない」ゆえの彼の苦悩もあったのだ。

3・過去の僕（前書き）

自分の体の不自然さに気づいた

3・過去の僕

3・過去の僕

はじめが自分の体の不自然さに気づいたのが初めての旧制高等学校を卒業してから10年ぐらい経ってからである。

はじめは学業に秀でて運動も良くでき体も丈夫で将来を期待されていました。

戦前と言ってもはじめはあの有名は難関大学の丁京大学の前身である一高の卒業生で、卒業後は某研究所で研究員をしていて給料もそこそこ良かったのだ。

はじめは普通の生活は少しだしらない所もあるのだが、先のことを見据えて行動ができ、1つの事に向かったの集中力はすごいものであった。

研究所での仕事というと政府からの委託された仕事もあったが自分の研究もできて給料まで貰える、はじめにとってはこれ程興味深い仕事はなかった。

そこでこの研究室の研究というと日本に昔から存在する神話、飲めば若くなる水「変若水」（おちみず）の研究をしていたのである。

研究所で助手をしていたはじめにはその神話のような水がこの世に存在しないし、作れるはずもないと思っていた。

しかしはじめが勤めだすとすでにその試作品が生み出されていたのである。

「そもそもなぜこのような研究が行われているんだ」

まだ職に就いたばかりのはじめには何も教えてもらえなかった。

そしてその日保存庫から一本の試作品が消えた

はじめが勤め始めて10年が経ち職場に慣れた頃一通の手紙が来た。それは一高の3年生で同窓会をしようという知らせであった。

毎日の研究で休む暇もなく働き続けるはじめは、最近休んでいないしたまには生き抜きも必要かなと、出欠カードに出席と書きこの手紙を出すようにと後輩に頼んだのであった。

もうはじめには仕事での部下ができていたのだ。

しかし周りから見るとその後輩とはじめは同級生いや、はじめの方が年下に見えるほどであり、はじめはそう思われている事に気がつかなかった。

研究に没頭する毎日であったはじめにとって同窓会の日は一瞬で過ぎたかのような速さでやってきた。

同窓会は休日に行われて場所は卒業した学校の教室であった。

4・同窓会 1（前書き）

はじめは走っていた

学生時代と今の走っている自分

4・同窓会 1

4・同窓会 1

はじめは走っていた。

「やばい遅刻だ・・・」はじめが走ったのは久々であった。

この年齢になってこんなに走る羽目になるとは思ってもいなかった。彼にとって走るという言葉を頭で考えたのが久しぶりだったのかもしれない。

はじめが3年生の時の教室は校舎の3階にあり、はじめは猛ダッシュで階段を駆け上がった。

今思うと昔は携帯もエレベーターもないし同窓会に相応しい店もない、とても不便であったのだ。

はじめは階段を上りながら昔の自分を思い出して少しおかしくなった。

「昔からまったく変わってないや」はじめは自分の学生時代と今の

走っている自分をダブらしていた。

学生時代のように階段を1つ跳ばしてどんどん上がっていった。

息を切らすことなく階段を上りきると正面に教室が見えてきて、はじめは突き当たりを曲がり、懐かしさで教室内を見渡しながら自分の目当ての教室を探した。

「ええっと、確かここだったかな」はじめは少し遠くから教室の番号を見つけた。

はじめは教室のドアの前に立ち1つ深呼吸をして「ごめん、遅くなつて」と教室に入った。

どういうわけかそこには同級生の姿が2人だけしかなかった。

名前は大橋慶一と田辺ゆう学生時代に一緒に遊んだ一番の友達でもあり、学業の成績を競い合った良きライバルでもあった

「よお、久しぶり」

「久しぶり」慶一とゆうが言った。

はじめはこの状況に戸惑いながらも「二人とも久しぶり！」と返した。

「あれ？まだみんな来てないの？」はじめが聞くと

「どうやら招待状が来たのはこの3人だけらしいな」慶一が深く考えさせないように言った。

「なんだよそれ」はじめがあわてて聞き返した。

「だってもう集合時間から20分も過ぎてんだぜ」慶一が頭の後ろで手を組み体を反らしながら言った。

「どうやら誰かが同窓会を装って私たち3人が集まるように仕組んだらしいね」とゆうが結論らしい答えを言った。

「誰か部外者によって仕組まれたとでも言うのか？」はじめが聞くと2人がポツリと頷いた。

「なんでまた・・・」はじめがこころあたりがないかと考えながら言った。

そうしているとドアが開く音がした。

「君たちよく来てくれた」あきらかに身分の高そうなスーツ姿の男が言った。

後ろには2人のがつちりした男が付き添っている。

「どうかね久しぶりに旧友と会った感想は？良いものだろ」

「ここに来てもらったのにもわけがある。」男が続けて話した。

「君たちは選ばれたのだ。これからずっとこの国を支えていく人間として。」

「これからずっと？意味がわからないな」はじめがあきれたように言い放った。

「君たちはまだ気づいてないのかな？いや忘れてしまっているのか？」スーツ姿の男が言う。

「何のこと？」田辺ゆうが言葉を返した。

「もうかれこれ10年ぐらい前になるのかはじめ君、君はある研究所に勤めだしたね？」

「当時あの研究所では何の研究をしていたか覚えているか？」男が続ける。

はじめは少し沈黙してから「10年前……確か若返りの薬を・

・・・」はじめの頭の中に答えと共に嫌な予感が頭をよぎった。

その嫌な予感を感じたのは、はじめだけではなかった。

同窓会 2（前書き）

田辺ゆうは明日の同窓会に向けて早く寝ようと布団に入った。

同窓会 2

同窓会 2

田辺ゆうは明日の同窓会に向けて早く寝ようと布団に入った。

「あの2人はちゃんとくるかな・・・」

「まあはじめ君は遅れてくるな」少し頬を上げながらゆうは言った。
はじめの遅刻癖は今に始まった事ではなかったようだ。

ゆうはうつ伏せに寝転び今している研究の資料を広げて見ていた。
いつしか眠りについていたみたいだ。

翌朝目覚まし時計の音と共にゆうは起き上がった。

「ああゝうるさい、うるさい」ゆうは目覚まし時計をなだめるようにスイッチを止めた。

カーテンからは光が漏れている。今日は晴天である。

ゆうは晴れた日が大好きで、今日の同窓会を楽しみにしていたらしく鼻歌まじりに着ていく服を選んでいた。

「ふふふ、この服が良いかな」鏡を見て服を体に合わせながらゆうはオレンジ色の綺麗な服を選んだ。

ゆうの体はスマートで顔立ちも整っていていつも年齢より若く見られるのだった。

ゆうが着替えている後姿を映す鏡には確かに何かが映っていた。

ゆうはそれを少し手でなぞった。

「後は化粧だ」ゆうはルンルン気分で化粧をはじめた。

元から化粧も必要がないくらいに綺麗な肌で整っているが今日は特別らしい。

まるで高校生の初デートの日みたいな感じと言ったら良いのだと思う。

ゆうはてきばきと身支度を整えて時間が迫っているのか足早に家を離れた。

「今日は、はじめ君と会えるのか、久しぶりだな」昔と変わってないのかな、もう会えなくなって10年ぐらい経つもんなあ」

どうやら朝からご機嫌だったのは、はじめと会えるのを楽しみにしていたらしい。

ゆうの自宅から程なく離れたところに同窓会の会場がある。

ゆうが門の前ぐらいいに通りがかかると「よお、ゆうでしょ？」後ろから大橋慶一がやってきた。

「慶一？久振りだねー、大人らしくなったね」「でも面影は残っている」「少し笑いながらゆうは言った。

「そりゃー俺ももう立派に大人になって働いてるしさ」慶一が少しふてくされながら言った。

「じゃあもうすぐ時間だしさ、歩きながら話そう」と慶一は続けた。

慶一は正義感が強く集場所などには必ず数分前に着かないと嫌な性格である。

「ゆうももう化粧しだすようになったんだ」慶一が言った。

「どう？私年とった？」ゆうがあわてて聞き返した。

「いや、化粧してるから大人っぽく見えるけど、よく見たら学生時代から変わってないよ」

慶一が少し驚きながらゆうに言った。

「なら少し安心」ゆうは嬉しそうだ。

2人は校舎に入り階段を一段一段上っていた。

「それにしても全然人影がないね。場所変わってないよね？」慶一が不安そうに言った。

「私も思ってた。もうすぐ集合時間だし、ここまで来るのに数人に会っていてもおかしくないよね」ゆうも少し不安そうだ。

「まあみんな早く着いて教室で待ってるんだろう、さあ行こう」ゆうを不安にさせないように慶一が言った。

2人は3階に着くと、自分達の教室を見つけた。

しかし教室内からは人の声もなくとても静かだった。

「みんな俺たちを脅かそうとでもしてんのかな？」慶一が苦笑いしながら言った。

「ハハハ、慶一私たちはもう立派な大人だよ。そんな幼稚な事しないでしょ普通」ゆうは慶一の考えに少し笑ってしまった。

「そりゃそうだな」照れながら慶一は言った。

「じゃあ入ろうか」ゆうはそう言いながら恐る恐る教室のドアを開いた。

その部屋は真夜中の教室のようにカーテンは閉まり誰一人といなかった。

「あらら、やっぱり誰も来てない……」ゆうの言葉を聞き慶

一も落胆した。

「とりあえずもう少し待ってみようか、はじめ君がもし来るなら少し遅れてくると思うし」ゆうが言うと慶一がすかさず

「そうだ俺らが来たということは、はじめが来る可能性も高い」そう言った。

「そうだねー私もそう思う」ゆうが慶一も同じ考えをもってくれているので安心した。

時間が経つにつれて2人の会話もなくなってきた。

ゆうが黒板の上の時計を見上げると針は集合時間から20分を過ぎた所をさしていた。

しばしの沈黙が流れていた頃、廊下を走る足音が聞こえてきた。

足音はこの教室のドアの前に止まったように思った。

少しドアの前で沈黙があり

「ごめん、遅くなって」ドアが開くと共にはじめの姿が現れた。

「よお、久しぶり」

「久しぶり」慶一とゆうが言った。

この光景にあきらかに少し戸惑っているはじめの姿があった。

ゆうから見ではじめはまだあどけなさが残る学生時代と変わりがない姿に見えていた。

「二人とも久しぶり！」はじめが言うと、少し同様を隠して無理をしながら言ったように見えた。

3人で話しているうちにはじめも落ち着いてきて、この現状について考え出した。

しばしの沈黙が流れ

そうしているとドアが開く音がしてスーツ姿の男が入ってきた。

ゆうには政府か何かの使いの者に見えた。

そのスーツ姿の男が何やら色々なことを話した。

君たちは選ばれたのだ、これから国を支えていくのだ、そのような言葉が飛びかっていた。

「君たちはまだ気づいてないのかな？ いや忘れてしまっているのか？」 スーツ姿の男が言う。

「何のこと？」 田辺ゆうが言葉を返した。

「もうかれこれ１０年ぐらい前になるのかはじめ君、君はある研究所に勤めだしたね？」

「当時あの研究所では何の研究をしていたか覚えているか？」 男が続ける。

はじめが少し沈黙してから「１０年前・・・確か若返りの薬を・・・」と頭の中の記憶を呼び起こしながら言った。

ふとゆうも自分の事ともダブっていることに気づいた。

「田辺ゆう、君も思い当たることがあるだろう」 スーツ姿の男が言う。

ゆうはあきらかに下を向いて同様が見える。

「まあ、良いんだ君ももう後戻りはできない」 スーツ姿の男が続けて言った。

「さて問題は大橋慶一君、君だね」

今まで何一つ状況がわからなく黙っているしかできなかった慶一が、急に男に名前を呼ばれ体を反応させた。

「君もこの国を影で支えていく人物になるかね？政府として支援はするつもりだ」

「そして君もこれ以上年を取らなくてすむのだよ」男は良い条件だと満足そうに言った。

「さっき話してた若返りの水の事か？そんなもんが存在するはずがないんだよ。」

馬鹿じゃないの？」慶一が笑いながら言った。

はじめとゆうは黙っているしかできなかった。

男ははじめの背中に指をさして「慶一君はじめ君の背中を服を上げて見てみる、何かがあるはずだ」そう言った。

「何か証拠でもあるのか？」

慶一はそう言いイスから立ち上がりはじめの服をまくり背中に目を

やった。

慶一は言葉が出なかった。

そこには月の形をした物が刻まれていた。

まだこれといって確信をもてなかったはじめも慶一の表情を見て確信が本当のものになった。

「そうかはじめ君は自分の背中の中に気づいてなかったのか、おそらく鏡なんか見ない生活をしているだろうから自分の成長が止まっているのにも気づいてなかったようだね」

男が言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4212e/>

はじめ

2010年10月20日19時01分発行